

S P A C 演劇アカデミー 5期生

だって、「希望とは行動に対する最悪の障害である」って誰かも言っていたよね。
サルトルだったかな。

この一節が含まれる架空の書簡（誰かから誰かに宛てた手紙）を作ってください。

ライティング課題 2025年12月5日

怜へ

本、送ってくれてありがとう。デビューおめでとう。紙の重みを感じた時、表紙の名前を見た時、1ページ目を開いた時…って、どんどん嬉しい気持ちが増えてったよ。

怜のことを考えながら、じっくり読ませてもらいました。面白かったよ。

大学いるときから持ち込みしてたとはいえ、卒業してからデビューまで大体2年。早い方だね？私の身体のことにも気にしてのことなのかな（傲慢（笑））。生きているうちに怜の出した本が読めて嬉しい。頑張ったね。ありがとね。

ただ私、どうしても申し訳なくなった。

怜の書いた小説、ものすごく面白かったし、嬉しかった。

けど私、怜が、わかりやすい文章を書くようになったなあ、って思ってしまった。

怜の書く文章や話って、昔はもっと象徴的な部分があるというか、読み手が想像する余地が多くて、私はそれが好きだったから。

多分、型にはまってくれたんだよね。「こうしたら話が売れる！」っていう型。デビューするために。私のために。そして、そういうわかりやすい話も、「困難に強く立ち向かえば絶対うまくいく！」みたいな型を私たちに教えてくれる。希望って言ってもいいのかな。

実を言うと、私、それがあんまり好きじゃない。だって、「希望とは行動に対する最悪の障害である」って誰かも言っていたよね。サルトルだったかな。

昔からだけど、病気してからは尚更。色んな人と関わって、「これ言っておけば心配してる、同情してるって伝わるでしょ」みたいな、型にはまった言葉をかけられてる、みたいを感じる時がある。相手はそんなつもりないかもしれない。それでも実際そういう型が存在しないわけじゃない。私だって使ってる時あると思う。だから、所謂人間ってこういうもの、みたいな型・希望って、ちょっとしんどい。

高校時代に読ませてもらった怜の小説は、だから私にとって心地よかったのかな。想像力が掻き立てられて、0か100かの結論がない。だからこそもっと他人の中身を覗きたくなるような。あ、でもこっちのほうがいいっていうのも私の考えの型の押し付けか。

ごめんなさい。それだけ伝えさせて。

あの日のことも、ごめんなさい。「死ぬまでに怜の小説が読みたい」なんて言って、怜を「デビューが正義」という型に縛り付けてしまっただけでごめんなさい。型にはまり続けると、自分の本質を見失ってしまうことって、あるから。それだけ、知ってほしい。

こんなダメ出しみたいなこと、それに自己満…だけど、怜が私のために本を出してくれたから、私も形に残るものを渡せてよかった。

あ、私、まだまだ生きてやるんだからね！次回作、待ってるね。

千里へ

お久しぶりです。

君の背中に住みついてから、もう 10 年が経とうとしています。

君はあの日、僕が君の前から姿を消したあの日から、息をして、歩みを止めず、

僕はそんな君のことを誇らしく思ったり、惜しく思ったりしました。

こんな手紙を君に、何ともないこんな日に急に渡すなんて、

僕はあの世でよほど、手に取れない水を何度も掴もうとして、

すり抜けていく温度に手放した物の価値を重ねて、見つめ続けてしまったんだと思うので
す。

君は 10 年前の、あの暗闇のうちに生きて、進めば一筋の光を見つけて、

生きている人も傷つけながら、それでも時間との並走を辞めないで、君の鼓動は単調に進み
続けた。

君が光の中を歩み始めたから、僕は君にこの手紙を届けました。

元気でいますか？

君の笑い声は、僕のいるところまで響いているから、たぶん大丈夫だと思うけど。

僕は愛情を持って、君のことを信じていません。

記憶の片隅に、くしゃくしゃと、乾いたベッドシートみたいに押し込まれた僕との記憶を、
引っ張り出して広げてほしいだなんて思っていない。

ただ、そのくしゃくしゃのまま、そっと置いておいてほしいだけなんです。希望などは託し
ていません。

だって、「希望とは行動に対する最悪の障害である」って誰かも言ってたよね。サルトルだ
ったかな。笑

僕はそんな、絶望のうちにこの便箋のうえを踊って、また君の記憶の片隅でくしゃくしゃに
なることを望んでいます。

どうか、そのくしゃくしゃの笑顔を、血の通う人間の頬に充てて、

その笑い声を、僕のいるところまで届け続けてください。

いつまでも僕のいるところまで、聞こえるように。

透

親愛なるソフィー

お元気ですか。朝の空気がつんと鼻を抜けて秋を感じることができるような季節になってきたね。そちらも朝晩は冷え込むのでしょうか。

フランスを発ってからもうすぐで1年。毎朝ココアの匂いで目が覚めていたあの暖かな家が、そしてあなたがとてつもなく恋しいです。日本ではあなたが好きだった金木犀の花々が咲きはじめました。花々の甘い香りをかぐと、まるでプルーストになったかのようにあなたをいつも思い出します。

私は先月から就職活動をはじめました。あなたと過ごした日々はあまりにもたのしくて、かけがえのないもので、そのままそちらで就職をしておもうかと考えたこともあったけれど、やはり幼い頃から抱いていた夢を追いかけることにしました。ソフィー、夢を追いかけるって楽しいものね。かつて話してくれた、若かりしソフィーのバリでの稽古の日々のお話を思い出すの。いつもこの話をしてくれるときにはあなたの目は一段と輝いてみえた。あなたもこんな気持ちだったのかしら。

帰国してからは教授からの勧めからインターンをはじめ、この間ついに私の案が採用されました。こんなに嬉しいことはないわ。憧れのキュレーターへの道をほんの少しだけど、前に進むことができた気がする。

幼い頃、父の「ただいま」という暖かな声を1番心待ちにしてた。画商の父はいつも家を留守にっていて、3か月に1度家へと帰って来る。さみしがりな私のために、モネやゴッホ、ルノワールの絵が施されたクッキー缶と多くの本を抱えて。父に会うことができるのは嬉しかったし、何より絵について話してくれる父の横顔が何よりも愛おしかった。やっぱり入って自分が好きなことやものを話すとき1番良い顔をするものね。その瞬間を見ることができただけで私はそれはもう満ち溢れた気持ちになったものよ。そうして私は花の都・パリにアコがれたの。世間の常識にとらわれず、ただひたすらに目の前の自らが描きたいものを見つめつづけた印象派の画家たちが、そこから新たな芸術分野を作り出した先駆者たちが、マルセル・プルーストが、数々の芸術家が生まれ育ち、彼らに愛され続けた街・パリ。そのすべてが魅力的で心惹かれた。そうしていつか父のように文化都市であるフランスと日本をつなぐ架け橋に私もなりたい、と思ったの。キュレーターになったらその役割を果たすことができるのかもしれないなあ、って。

エントリーシートを書きつづけて心が折れそうになる日々だけど、私はこの夢を絶対にあきらめたくない。あきらめない。でももしソフィーに出会っていなかったら今の私はいなかったのかもしれないなって最近、思うの。きっとインターンにも参加していなくて、プレゼンなんてもってのほかだったんだと思う。

ソフィーと暮らし始めてから数週間たった頃かな。私は右も左も分からず、日本で必死に身に着けて来た言葉も通じず、留学生という立場に甘えてお客様気分で話しかけてもらうのを待っていて・・・もう自分の留學生活を諦めてた。憧れのパリに住んで私は浮かれてたんだって、物事はそう上手くいくわけがないって。そんな私にとって夕食後、暖かな暖炉の前で編み物をしながらあなたとお話する時間は、何よりの救いでした。ある日ソフィーが言ってくれたよね。

「パリはたゆたえども沈まず。だって『希望とは行動に対する最悪の障害である』って、誰かも言っていたでしょう。サルトルだったかしら。希望を抱くだけではなく、まずは行動してみなさい。私も_____若い頃、この言葉を胸に夢を追い続けてきたのよ」って。

ソフィーがくれたサルトルの言葉が今も私の背中をそっと押し続けています。怖くても、不安でも、まずは行動してみることに。その大切さを、私はあなたから学びました。

またいつか夢を叶えたその日に、金木犀の香りが届く季節に、あなたに会えますように。

心からの感謝と愛を込めて。

さらより

【手紙】

芸術の道を選んだ娘から両親へ高校の卒業式に渡す手紙

山下ゆうり

お父さん、お母さんへ

いつも私のやりたいことを応援して、支えてくれてありがとう。

おかげさまで今年18歳になり、高校を無事に卒業することができました。

高校3年間で振り返ると、私は本当に演劇ばかりしていました。

何も分からずに飛び込んだ演劇部で最高の仲間と出会い、SPACにもお世話になって、気がつけば演劇が大好きになっていました。浜松から私を笑顔で送り出してくれてありがとう。やりたいことを思いきりやらせてくれるお父さんとお母さんのところに生まれて私は幸せ者です。

私は大学に進学し、演劇の道に進むことを決めました。

この前、大学の発表会を観に行ったときに「ここなら自分を成長させることができる」と確信して、これからの大学生活に胸が高鳴っています。みんな忙しいって言うような学校だけれど、その忙しさも楽しんで、足りないところを全部吸収して、成長した姿を家族に見せることができるようによく努力してきます。

でも、実を言うと、大学に合格したとき少し不安になりました。「もう演劇の道しかなかったな」と思ったのです。

芸術の世界には成功の保証がありません。劇団や事務所に入れなかったらどうしよう、将来ちゃんと生活していけるだけの収入を得られるのか、大学卒業後の未来が、想像できなくて不安です。だけど、私はこの不安をチャンスに変えたいと思っています。「希望は行動に対する最悪の障害である」って確かサルトルも言っていたよね。私は希望があるとそれに頼ってしまうと思います。逃げ道がない今の状況だからこそ、どんな壁にも立ち向かって夢に近づくことができるとしています。成長のためのチャンスだと思って楽しみます。絶対に成功して、家族とお世話になった人たちに恩返しすると心に決めました。胸を張って舞台上立つ私を見てもらえるように頑張ります。

一度きりの人生だから、後悔しないように思い切って大好きな演劇の道を選びました。いい方向に行くと思っていて、不安ごと抱きしめて前へ進みます。これからは沢山心配をかけると思うけど、どうか温かく見守ってください。

自慢の娘になれるように一生懸命頑張ります。

いつもありがとう。これからもよろしくね。

山田芽生

アリアナグランデ様

私はあなたと重なる部分が多いように思います。高校生の頃から肉や魚を食べることで、自分の体の中に別の獣がいる感覚を覚えました。また豚や鶏、魚たちのことを思うと違和感を抱えたまま食べるのは申し訳ないなと思いました。動物たちだって可哀想。ビーガンになると決める時、あなたもビーガンだから心強かった。

最近昔気になっていた男性からデートに誘われました。そのままの流れでその男性のおすすめの店へ食事に行くことになりました。肉魚は食べられない、脳の中ではその情報でいっぱいなのに、もう少し同じ時間を過ごしたい、相手の話を聞きたい、自分の話もしたい、それだけの気持ちで足は動きました。お店に入り、メニューを見ると、案の定でしたがビーガン対応はありませんでした。私はグラタンを頼みました。鶏肉が入っていました。スプーンを持つ手が震えていたそうでしたが、彼の話なのか、仕草なのか、顔なのかわかりませんが、彼の纏う雰囲気がいかに魅力的で、店を出るという考えは私にはありませんでした。食べた後すぐにトイレに駆け込み吐きました。ずっと食べていなかったものを食べることができ、不思議な気持ちを抱えながら、お会計を終えて外に出ると、入る前と同じ景色が見えました。同じように紅葉した葉がひらひら美しく落ちていていました。美しく、変わらない景色の中に変わってしまった私の気持ち悪さは一層目立ちました。

男性と別れて寄り道しながら帰りました。途中入ったお店であなたの歌が流れていました。相変わらず私の大好きな声でした、でもみんなも同じように聞こえていると言うことが強く心を打ちました。同じと言うところに奇妙さを感じました。

世界は変わっていなかった。あなたの歌はみんなに同じように聞こえる。私はこれからどうすればいいのでしょうか。このままビーガンをやめる？だって、「希望とは行動に対する最悪の障害である」って誰かも言っていました。サルトルだったかもしれません。

私はこれからどうしよう。

驚見心寧

来週は待ちに待った体育大会だな。...ごめん、急に手紙なんか送られてきたら「へ？」と思うだろうけど、なんとなくLINEは嫌だったから書いてみた。

で、なんの話をしたいのかっていうとね、いや俺だってどーでもいい手紙は出さないよ、そのね、吾妻(あずま)が靭帯損傷したらしい。いやー参ったなー。吾妻出れないんだってさ、選抜リレー。マジで悔しい。最悪。

でもこれが1番言いたかったことってわけじゃなくて。俺はお前に怒りたい。いや、ずっと怒ってたけど言わなただけで。...お前さ、リレーで優勝したいって言ってるくせに、周りに指示出すだけで何にも練習してないよな。もうちょっとさ、リレメンの1人として自覚持てよ。お前も走るんだろ？他のリレメンも絶対同じこと思ってるぞ。...吾妻がいなかったらうちのチームは勝ち目がないってわかってるだろ...

お前さ、本当に勝ちたいのか？俺は勝ちたい。吾妻の分まで走って勝ちたい。あいつ物凄く悔しがってたもん。あいつのために勝ちたい。

だからさ、やろうぜ、練習。一緒にやろうぜ。まだ一週間あるから間に合うかもしれない。俺知ってるから。お前が去年のリレメンでどんでん返しをして優勝に繋がったってこと。やればできるだろ？このままで恥ずかしくないのか？やろうぜ。朝グラウンドで待ってるから。

エーエツヘン(←これ咳払いね)、「希望とは行動に対する最大の障害である。」君にこの言葉を送ってやろう。この絶体絶命であり希望が全くない状況なら、お前の行手を阻むものなんて何もないっ！お前の力が真の能力を発揮するだろう。君の活躍に期待しているぞ！それでは、朝のグラウンドで。さらばあー

木下君、あけましておめでとう。

元気にやっていますか？　なんて、意味のない挨拶がしたかったわけではなくて。

昨年末、三島由紀夫さんが市ヶ谷で自決したというニュースを見ながら、どういうわけか、ああ須藤君だ、須藤君と一緒にだ……と思って。須藤君のことばかり思い出して。それでふと、いつも三人一緒だった本郷の日々を思い出して、君に手紙を書きたくなりました。

外科医の修行は、どうですか。私はまだ、産婦人科について、右も左もわかっていません。先輩たちのうしろを、ひたすら、ウロウロついて回るだけ。産婦人科なのに、想像以上に、男社会。おかしいよね。でも、良かったと思うこともある。病院で「おめでとう」という言葉が聞けるのは、産科だけだと言っただけじゃない？　これまでマイナスをゼロにするのが医療者の仕事だと思っていたけど、分娩に立ち合って、ゼロをプラスにすることもできるんだって、改めて感動したの。だから、私は絶対、分娩を扱う医師になりたい。女の体のことは、女がいちばんわかっているはずだし。

閑話休題。須藤君がああ若さで亡くなったのは、もちろん持病が悪化したからで、別に三島さんのように、政治的信念に殉じたわけではないし、絶望して自殺したわけでもないけれど——でも須藤君が最後に入院してから、週刊誌やテレビで三島由紀夫という人を見かけるたびに、私は、クリクリした目が須藤君に似ている……って思っただけ。本人が元気だったときは、そんなこと思わなかったんだけどね、目が似ているのは、本質が似ている証拠なんじゃないか、なんてさ。

彼、やたらと薬を飲んでいたよね。木下君、覚えてる？　無期限ストのときだったかな、須藤君、調子が悪そうだったでしょう。あるとき、何錠も服薬しているのを見てしまっただけ、そんなに飲まなきゃいけないの？　って聞いたたら、須藤君は「藪医者言うことなんか信じちゃいないんだけどね」って、ニッコリ笑ったの。その笑顔は、今思うと、やっぱり三島由紀夫という人の笑顔に、そっくりだった気がする。

「信じちゃいないだったら、どうして処方された通りに飲んじゃうの」って聞いたたら、やっぱり彼は、微笑んで答えなかった。「……だったら、早く名医にならなきゃいけないじゃない、自分のために」って言ったんだけど、そうしたら須藤君は、「そんなくだらないことのために、医師を目指すつもりはないよ」って答えて、また笑ったの。自分のこと

なのに。自分の命のことなのに。あんなに、屈託のない笑顔で。

つまらない励ましは要らないってことだったのかな。いかにも彼の言いそうなことでしょうか？

それでね、「じゃあ何のために医師を目指すの？」って尋ねた記憶はあるんだけど……須藤君がなんて答えたのかは、どういうわけか、覚えていないんだ。

木下君、そんな話をしたことあった、須藤君と？ もし覚えていたら、教えてくれないかな？ 須藤君は、じゃあ何のために、医師を目指していたんだろう？

……でも、彼のことだから、本気で、答えらしい答えを口にしたとも思えないんだよね。他人に聞かれるたび、それらしいことを答えていた記憶はあるんだけど。たぶん、あの悪戯っぽい表情——ポーカーフェイスだけど、クリクリした目だけが笑っている——で、人をからかうようなことしか、言わなかったと思うんだ。だから私も、さっぱり覚えていないんだと思う。

今になって思うと、須藤君は、別に早死にしても構わないって思っていたんじゃないかしら。だから、あんなにたくさん薬を飲んでも平気だったんじゃないかな。ただ、「死んでも構わない」と「死んでしまいたい」は、違うよね。彼は決して、積極的に死のうとしていたわけではない。かといって、積極的に生きのびようとする希望も、なかったんだと思う。だって、「希望とは行動に対する最悪の障害である」って誰かも言っていたよね、サルトルだったかな。きつとサルトルだね。「希望とは行動に対する最悪の障害である」——いかにも、彼好みの科白だと思わない？

そう、確かに、須藤君は、行動していた——何の希望もなくせに。機動隊と衝突したときだって、あんなに体が弱かったくせに、自分から隊列の前に出ようとして——流れに逆らう鮎みたいに——だから私は必死で彼のコートを引っ張ったの、「頭を割られるよ、須藤君！」って。あれはまるで、自分の命を賭け金にして、ゲームをしているみたいだった。

須藤君、いいかげんにしなよ！ 自分の命だからって、命を弄んじゃいけない！ ねえ、あたしたちは、医者卵なんだよ！ 医者卵がやっていいことじゃないでしょう!!

須藤君は何も言わず、私を見返して、その目はまるで、私を憐んでいるみたいに見えて。それで私は本当に腹が立って、「言いたいことがあるなら言いなよ！」って怒鳴って、つかみかかって、そのまま、彼の胸で泣いたの。

……ねえ、三島由紀夫って人も、同じなんじゃないのかな。あの人、「天皇陛下万歳」って、本気で信じていたと思う？ 憲法を改正して自衛隊を軍隊にするって、命を賭けるようなことなのかしら？ あたしにはわからない。右翼の言い分がわからないってことでなくて、三島さんという人の、本心がわからない。実存がわからない。たぶん本当は、自分でも信じていなかったんじゃないのかな、軍隊も、国家も、天皇陛下も。ただそこに、自分の命を賭けてみたかっただと思う。賭けるに値する何かがあるんだって、信じたかっただと思う。

生きるか死ぬかの瀬戸際で、わざと自分の命を危険にさらして、死んでしまえばハイそれまでヨ、でも生きられれば――

生きられれば――？

一日生きのびるたび、須藤君にとっては、またひとつ賭けに勝ったことに、なっていたのかな？

ごめんね、木下君。私は、彼のことが好きだったの。愛していたの。だから、木下君の気持ちはわかっていたのに、あんなことを言っちゃったの。

返事が欲しいと思って書き始めた手紙だけど、返事は要りません。これを、投函するかどうかもわからない。このあと、封筒ごと燃やしてしまうかもしれない。

ねえ、木下君。生き残った私たちは、人の命を救う、立派な医師になろうね。だって、少なくとも私には、もうそれしか残っていないんだもの。

今は、故郷の上田で、この手紙を書いています。実家の私の部屋の窓からは、千曲川が、キラキラ輝いて見えています。あの川の流れは、どこにたどり着くんだろうって、子供心に、いつも思っていました。

私は、大人になったのに、まだわかりません。

さよなら、木下君。たぶん、もうこんなふうには、手紙を書くこともないでしょう。

どうぞお元気で――